

保育者養成校学生が考える 「保護者が求める子育て支援」の安定性 —本学学生の2018年度と2019年度の比較から—

永盛善博

問題と目的

昨年度の本学雑誌『教育研究』第9号では、本学4年生が考える「保護者が求める子育て支援」が科目「子育て支援実践」受講前後でどのように変容するかを、アイデア発想ツールのマンダラートと、計量テキスト分析ツールのKHcoderによる共起ネットワークを用いて検討した（永盛、2019a）。本研究はその継続研究に相当する。

本研究では、今年度の受講生を対象に昨年度と同様の調査を行い、昨年度の結果と比較することを通して、「学生が考える子育て支援」の安定性を探るものである。

現在の日本においては、行政、企業、NPO、地域、福祉（保育もここに含む）など、多様な活動主体が子育て支援活動を行っている。その内容は、複数の主体が類似した子育て支援を行っていたり、それぞれの立場だからこそできる子育て支援を行っていたりと、多角的・相補的なものとなっている。

このような中で、保育者による子育て支援の独自性は必ずしも明確とはなっていない。平成30年の改訂で支援の対象や目指すところが示されたものの、具体的な方法論やその他の業種との連携などについてはまだ不明確であり、ようやく明らかになりつつあるところである。このことを反映してか、最近1、2年に出版された保育における子育て支援に関する書籍では、『保育者のための子育て支援ガイドブック』（武田、2018）、『保育の専門性を生かした子育て支援』（亀崎、2018）、『保育実践に求められる子育て支援』（小原・三浦、2019）（いずれも傍点は印象者による）と、複数の書籍において、保育者ならではの、保育者独自の子育て支援を強調するようなタイトルが付けられている。

保育者における子育て支援の射程がまだ定まっていない中、当然のこととも言えるが、保育者養成段階における子育て支援については、以下に挙げるような未解決の問題点がある。たとえば、養成段階で身につけなければならない知識・技術とは何か。養成段階で身につけうる知識・技術とは何か。これらの知識・技術を身につけるため

の方法はどんなものか。知識・技術を身につけたかどうかの評価方法は、どのようなものが考えられるか。そもそも現場の保育者が行う子育て支援は、養成段階で学生が行うことと同種なのかどうか¹。

以上のことを踏まえ、本研究では、学生が考える「保護者が求める子育て支援」について検討を行う。理想的には、上述の問題が解消された上で、養成段階での子育て支援に関する取り組みがなされることが望ましい。とは言うものの、子どもと保護者はすでにおり、学生も学びを進めているのであり、問題が解決されていないからといって、学生に対して何も教育をしないわけにはいかない。これらの問題の解決を目指しつつ、目の前の学生に対してできる限り望ましい教育を行っていく必要がある。

そのために、本研究では、学ぶ前の学生の理解を出発点に置く。発達心理学・教育心理学においては、学習者は新たなことを学習するにあたり、その学習内容に対して無知ではなく、何らかの知識や理論を独自に作り上げていると想定する。こういったものを素朴理論、素朴概念と呼んだりする²。そして時に、これらの理論・概念が、科学的に正しいとされる知識を受け入れることを阻害したりするとされる。一方、学習者があらかじめ持っている知識・理論をあらかじめ把握しておき、それをうまく刺激・活用しながら教育を行えば、より高い教育効果が期待されるであろう。

このようなことから、本研究では、昨年度の学生と今年度の学生で、「保護者が求める子育て支援」にどのような共通点や違い、特徴があるのかを明らかにする。

方法

調査方法は、原則として昨年度と同様である。

対象：本学子ども教育学科4年生（編入生含む）で、科目「子育て支援実践」受講生のうち、回答が得られた41名。

学びの状態：保育実習、幼稚園教育実習を終えている。「子育て支援」と銘打った科目の受講は初めてであるが、保育実習ⅡAもしくは保育実習ⅡB（保育所かその他の児童福祉施設）で保護者との関わりに関する講話を実習先で受けている。また、家庭支援論、児童家庭福祉、相談援助などの関連科目も受講済みである。

手続き：「子育て支援実践」第1回授業冒頭で、本科目シラバスのおおまかな解説を行なったのち、マンダラートを配布して各自で作業を行った。教員からの指示として、可能な限り8マスを埋めるように伝えた。その結果、ほぼ全員が8マスを埋めることができた。

倫理的配慮：授業内容として記入したマンダラートについて、個人が特定されない状態で分析・公表することの許可を受講生に求めた。またその際、分析・公表に同意しなくても、成績には影響がないことも併せて伝えた。その上で、許可が得られた学生分のマンダラートを分析対象とした。最終的に、掲載を許可しなかった学生は

¹ これらのような点については、複数の研究者からの指摘があるため、この点の指摘を含め、永盛（2019b）は先行研究のメタ分析を行った。

² 素朴概念と素朴理論は、本来は別物である。また、類似概念として誤概念や前概念、ル・バーと呼んだりすることもある。しかし、これらの区別は本研究の主眼ではないため、区別せずに併置した。

いなかった。なお、これらの確認は、マンダラート作成後に行った。公表の可能性
があることを事前に伝えることで、学生の発想が制限される危険性を回避するため
であった。

結果と分析

今年度学生のマンダラート

学生が提出したマンダラートのうち、最初に上げた8つのアイデアを対象に
KHcoderを用いて集計し（表1）、共起ネットワークを作成した（図1）。

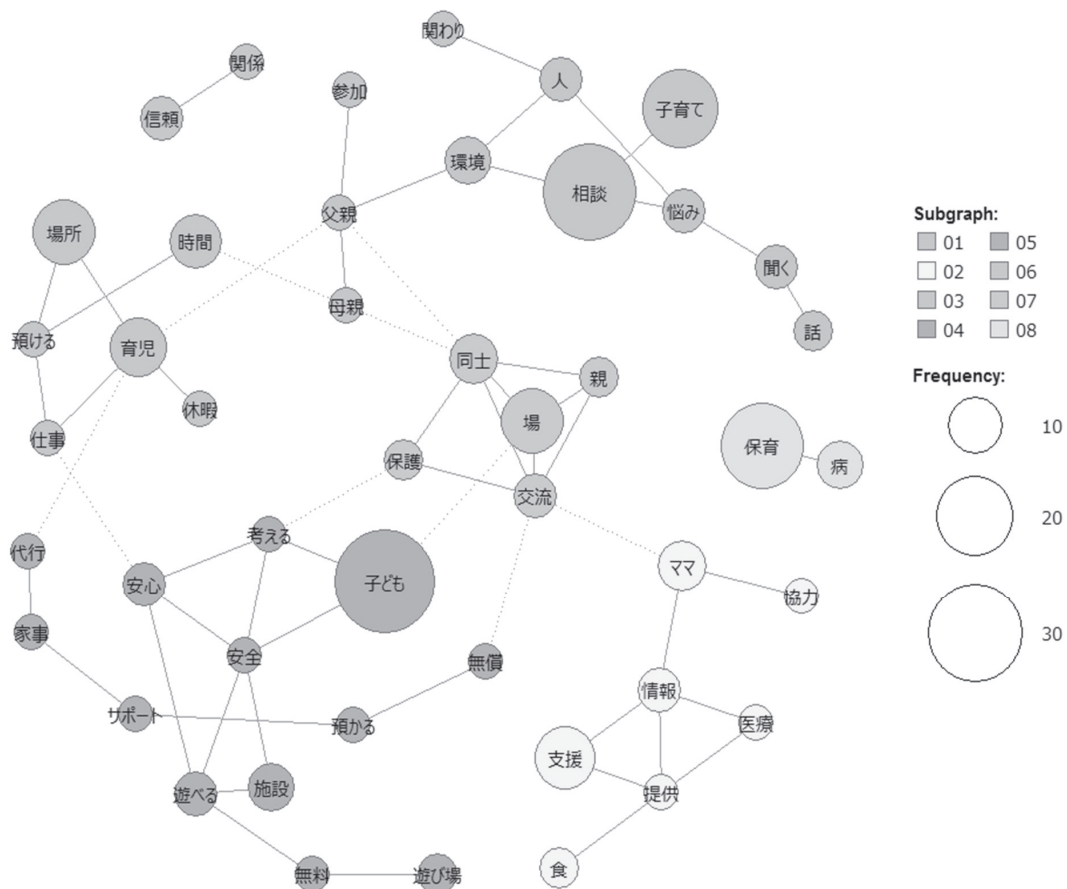


図1 学生が考える「保護者が求める子育て支援」の共起ネットワーク

まず表1において頻出したものとして、「子ども」「保育」「子育て」「支援」「育児」
は、保育や子育て支援について考える場において、当然出現すると予想されるもので
ある。特徴的な単語として、「相談」という単語が2位（29件）に出現している。共
起ネットワークでつながりのある単語を確認すると、「子育て」や「悩み」「話」「聞
く」、「人」「関わり」などが挙がっている（右上の島）。このことから、「子育てに関
する悩みを保護者が相談し、誰かがその話を聞く」ことが、学生の考える子育て支援
として挙がってきていることと分析できる。このキーワードが多く出現するというこ
とから、学生が考える保護者像として、「悩みを持っており、相談を必要としている」

姿が窺える。

同じく頻出したものとして「場」「場所」がある（ともに13件）。一見すると類似した単語であるため、同じ扱いとも見える。しかし、共起ネットワークではそれぞれは異なる文脈を持つようである。「場」は中央の島にあり、「親」「同士」「交流」と共起しており、「保護者が集い、交流する場」を学生が想定していると分析できる。一方「場所」は左上方の島にあり、「育児」「預ける」「仕事」「時間」「休暇」と共起していることから、「仕事や育児の休暇で時間が必要な時に、預ける場所」を学生が想定していると分析できる。同じ空間として、「施設」は7件と出現数は多くないものの出現している。共起している左下方の島では、「子ども」「遊べる」「遊び場」「安心」「安全」「無料」が挙がっており、「子どもが安全・安心に使える無料の遊び場」もまた、必要と考えられている。このように目的は違っても、「場」「場所」「施設」いずれも特定の「空間」であり、子育て支援のための空間が必要とされていると学生が考えていると推測される。

その他に共起ネットワーク上で島を形成しているものとして、まず、右下にある「ママ」「協力」「情報」「支援」「提供」「食」「医療」の島がある。これらは、「母親が子育てをするにあたり、食や医療、協力に関する情報提供という支援」というものと推測される。この場合、上述のような特定の空間というよりは、必ずしも形を伴わないサービスと言える。

もう1つの島は、左中央にある「家事」「代行」「サポート」「預かる」「無償」というものがある。これらは、子育てというよりは家事に関するものであり、しかも「代行」とあるため、「子育てを行うための、家事の代行やサポート」もしくは「家事を行うために、無償で子どもを預かってほしい」といったニーズを反映していると読み取ることができる。

最後に、2つだけの単語がつながっているものとして、「信頼」「関係」（左上）と「病」「保育」（右中央）がある。前者については、セットとしてみるべきものであり、保育において常に重要なものとして学生が教わっているものと思われる。その重要さと比べて数の出現が少ないのは、あまりに重要な前提となっており、あえて「保護者が求める子育て支援」としては挙がって来なかった可能性がある。次に後者の「病」「保育」についても、セットで考えて「病児保育」「病後児保育」と見なしてよいものであろう。

以上のことをまとめると、学生が考える「保護者が求める子育て支援」は、「悩み相談（話し相手）」、「特定の場所（集う、遊ぶ、預ける）」、「情報提供（食や医療）」、「家事・託児サポート」「信頼関係」、「病児保育」といったものとなる。これらの支援を担う主体としては、保育所、幼稚園、認定こども園といった保育施設、NPOの子育て広場、家事・託児サービスを提供する企業などとなる。

表1 出現した単語と出現数

単語	出現数	単語	出現数	単語	出現数
子ども	34	サービス	3	作れる	2
相談	29	センター	3	参観	2
保育	23	延長	3	姿	2
子育て	19	家	3	子	2
場	13	給食	3	児童	2
場所	13	行事	3	時短	2
支援	12	資金	3	自分	2
育児	11	自然	3	自由	2
時間	9	充実	3	手厚い	2
ママ	8	親子	3	受ける	2
同士	8	生活	3	集まり	2
環境	7	相手	3	集まれる	2
施設	7	体験	3	紹介	2
病	7	対応	3	身近	2
安心	6	知識	3	整備	2
交流	6	発達	3	先生	2
情報	6	夫婦	3	先輩	2
信頼	6	雰囲気	3	窓口	2
人	6	方法	3	息抜き	2
悩み	6	遊ぶ	3	存在	2
聞く	6	利用	3	知る	2
遊べる	6	両立	3	知れる	2
食	5	たより	2	地域	2
親	5	アレルギー	2	定期	2
保護	5	イベント	2	土曜	2
遊び場	5	オムツ	2	働く	2
話	5	スクール	2	病気	2
サポート	4	ストレス	2	負担	2
安全	4	セミナー	2	保育園	2
医療	4	リフレッシュ	2	補助	2
家事	4	安い	2	友	2
関わり	4	育	2	理解	2
関係	4	一貫	2	離乳食	2
休暇	4	一時	2	連絡	2
協力	4	園	2	話す	2
健康	4	援助	2	お下がり	1
考える	4	会	2	ささい	1
参加	4	絵本	2	それぞれ	1
仕事	4	楽しめる	2	やり方	1
代行	4	機関	2	アドバイス	1
提供	4	気	2	サイト	1
父親	4	気軽	2	サロン	1
母親	4	共感	2	スペース	1
無償	4	共有	2	ダイヤル	1
無料	4	勤務	2	バス	1
遊び	4	近い	2	パパ	1
預かる	4	見る	2	マップ	1
預ける	4	向き合う	2	メール	1
お金	3	講演	2	ヨガ	1
たくさん	3	講習	2	レクリエーション	1

昨年度学生との比較

昨年度学生の結果と比較するため、表2を作成した。左のコラムが昨年度（2018年度）学生のものであり、右のコラムが今年度（2019年度）学生のものである。なお、各単語の出現率は年度ごとに算出しており、各単語を各年度の出現単語総数で割り、100倍にした%値である。また、出現した単語の種類が多くなり、2件以下のものは検討材料としては注目度が低くなると思われたため、便宜上3件以上のみを掲載してある。さらに、表1とは異なり、同じ出現数のものは同じ順位としてまとめて表記してある。

表2 2018年度と2019年度での各単語の出現順位・出現数・出現率

2018年度				2019年度			
順位	単語	出現数	出現率	順位	単語	出現数	出現率
1	保育	24	3.34	1	子ども	34	3.96
2	子ども	23	3.20	2	相談	29	3.38
3	支援	22	3.06	3	場	26	3.03
4	場	21	2.92	4	保育	23	2.68
5	経済	12	1.67	5	子育て	19	2.21
6	子育て、預ける	10	1.39	6	遊べる	13	1.51
7	同士、離乳食	9	1.25	7	支援、母親、預ける	12	1.40
8	延長、時間、相談、保護	8	1.11	8	育児	11	1.28
9	親、早朝	7	0.97	9	時間	9	1.05
10	育児、園、家、見る、施設、悩み、来る、食	6	0.83	10	同士、無償	8	0.93
11	サービス、一緒、広場	5	0.70	11	環境、施設、病	7	0.81
12	イベント、カフェ、トイレトレーニング、援助、作り方、地域、提供	4	0.56	12	安心、交流、情報、信頼、人、悩み、聞く	6	0.70
13	お願い、お迎え、家庭、確保、環境、気軽、金銭、講座、参加、児童、父親、遊べる	3	0.42	13	食、親、保護、遊び場、話	5	0.58
				14	サポート、安全、医療、家事、関わり、関係、休暇、協力、健康、考える、参加、仕事、代行、提供、父親	4	0.47
				15	お金、たくさん、サービス、センター、延長、家、給食、行事、資金、自然、充実、親子、生活、相手、体験、対応、知識、発達、夫婦、雰囲気、方法、利用、両立	3	0.35
		総数	719			総数	859

回答者数が10名程度異なるため、各単語の出現数には違いはあるものの、もっとも多く出現したものでも全体の4%にも満たない点は、年度間で共通している。また、同じ3件と区切ったところ、その出現率も年度間でほぼ同様の結果となっている。一方で、人数が多いことに由来するのか、下位の方の単語は、人数が多い今年度の方がより多様に出現している。

つづいて、これらの表2の中で、年度間の違いが見られたものをまとめたのが表3である。表上段は2018年度に特徴的なもの、下段は2019年度に特徴的なものである。また、左列は一方の年度で1%以上多く出現したもの、中列は一方の年度で0.5%以上1%未満で多く出現したもの、右列が各年度でのみ見られたものである。

表3 2018年と2019年で違いが見られたもの

2018年で1%以上多い 2018年で0.5%以上多い		2018年のみで出現
支援	保護、延長	経済、離乳食、早朝、園、見る、来る、一緒、広場、イベント、カフェ、トイレトレーニング、援助、作り方、地域、お願い、お迎え、家庭、確保、気軽、金銭、講座、児童、
2019年で1%以上多い 2019年で0.5%以上多い		2019年のみで出現
相談、遊べる	子育て	母親、無償、病、安心、交流、情報、信頼、人、聞く、遊び場、話、サポート、安全、医療、家事、関わり、関係、休暇、協力、健康、考える、仕事、代行、お金、たくさん、センター、延長、家、給食、行事、資金、自然、充実、親子、生活、相手、体験、対応、知識、発達、夫婦、雰囲気、方法、利用、両立

特徴として、2019年度学生においては「相談」「遊べる」が2018年度学生より多く出現している。共起ネットワークの分析と合わせると、「母親の悩み相談」「子どもの遊び場」に対するニーズが、今年度が学生では高く見積もられている。一方、2018年度学生の方で多く出現したのは「支援」であるが、これは問いの前提となるものであり、具体的なものとは言えない。この点は、2018年度「保護」や、2019年度学生の「子育て」についても同様である。2018年度学生で多く出現したもので特徴的なのが、「延長」である。延長保育を想起させる単語であり、2019年度学生が想定したような、子育て支援のための「特定の場所」というよりも、日常の保育の中での子育て支援を想起していたと推測される。

各年度のみで出現した特徴的な単語として、2018年度の「早朝」が挙げられる。これは「早朝保育」としたものであり、上述した「延長」と対になるものであると推測される。すなわち、こちらも延長保育も日常の保育の場において行われる子育て支援である。一方2019年度のみで出現した単語として特徴的なものは、「病」がある。こちらは先述したとおり「病児保育」を指すものであり、2018年度の「早朝保育」「延長保育」と違い、開設している場所の少ない特殊な保育ニーズと言える。そして、このような特殊なニーズがあることへの学生の認識が、2019年の場合見られたことになる。

加えて、2018年度に特徴的だったのが、「経済」という単語が多く出現していることである。経済支援、より具体的には児童手当を想起させるものである。この支援主体は、これまで出てこなかった「行政」であり、ユニークな傾向である。

考察

本研究の目的は、保育者養成校4年生を対象に、学生の考える「保護者が求める子育て支援」の調査を行い、年度間比較を行うことで学生の傾向・安定性を探り、学生に「保育者による子育て支援」教育を行うための基礎資料を得ることにあった。

その結果、全体としては年度間で類似した単語が、類似した頻度で出現する傾向があり、学生の考えは、年度間である程度安定したものであることが確認された。

一方で、違いも見られた。2018年度学生の回答の特徴としては、経済支援といった行政サービスが多く出現したこと、延長保育・早朝保育といった、日常の保育の場での子育て支援サービスが多く出現したことが挙げられる。また、これらはどちらかと言えば「あると助かる」支援と言える。一方、2019年度学生の回答の特徴としては、「母親の悩み相談」「病児保育」といったように、「ないと困る」支援と言える。子育て支援自体は、どちらが正しいというわけではなく、どちらも必要なものではある。子育て支援は悩んでいる人しか受けられないものではないし、予防の観点からも、「あると助かる」段階で支援をしておいた方が望ましい。そのような意味で、学生を指導するにあたって、その学年の傾向を最初の段階で把握し、その傾向に応じた教育内容を意識することが重要となる。

最後に、学生の傾向の違いは何に由来するのかについて、考察を行うことを通して、学生への教育への示唆を得たい。まず、傾向の原因の1つとして考えられるのが、大学での教育の影響もさることながら、今年度の世相の反映ということである。今年度は6月にカネカ転勤問題に端を発して、その他の企業でも単身赴任問題やそれに伴うワンオペ育児問題がニュースとして多く取り上げられた。さらに、ワンオペ育児の中での児童虐待死や国家公務員男性の育児休業取得の義務化など、子育てに関するニュースが複数紹介されていた。このようなことを、学生が耳にしていた可能性は大きく、それが今回の調査の結果にも反映されていた可能性がある。したがって、学生の傾向を把握し、その傾向を踏まえた教育を行うにあたり、話題になったニュースを取り上げ、そのニュースが子育て支援全体の中でどのように位置づけるかを教員が解説したり、学生自身が考えるきっかけを作ったりする。この作業により、学生自身が目を向けていなかった、より多様な子育て支援にも注目が向かい、結果として、保育者として行うべき子育て支援、そしてそのために学生の間に行うべきこと、身につけるべきことが際立っていくことが期待される。

引用文献

- 亀崎美沙子（2018）保育者の専門性を生かした子育て支援：「子どもの最善の利益」をめざして．わかば社．
- 永盛善博（2019 a）科目「子育て支援実践」受講による学生の「保護者が求める子育て支援」の変容．東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究，9，41－50．
- 永盛善博（2019 b）保育者養成校における学生参加型の子育て支援活動の教育効果：先行研究のメタ分析からの示唆．東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要，9，2－11．

小原敏郎・三浦主博（2019）保育実践に求められる子育て支援．ミネルヴァ書房．
武田信子（2018）保育者のためのガイドブック．中央法規．